

増田伸夫 (中野市)

☆池上彰×佐藤優『希望の資本論』(朝日文庫) (その2)

定価：580円(税別)(2016年6月30日第1刷発行)

池上彰は1950年、長野県生まれ。フリージャーナリスト。

佐藤優は1960年、東京都生まれ。作家・元外務相主任分析官。

\*

池上・佐藤『希望の資本論』(その1)の要約の要約

### 第1章：ピケティからマルクスへ

- ①資本論では賃金は、1) 自分の労働力の再生産、2) 次世代の労働力の再生産、3) 自己教育、それぞれの費用合計で決まる
- ②放っておけば賃金は2)3)を無視し1)を満たすだけまで下がる
- ③資本論の賃金論では、賃金と<内部留保や分配>とは無関係

### 第2章：一冊の本(『資本論』)が世界を変えた

- ①ソビエトの人たちにわからなかった(良質な)労働力の商品化
- ②国民が国家に寄生した結果ソ連はサウジのような国になった

### 第3章：マルクス主義先進国ニッポン(講座派と労農派)

- ①日本特殊論の講座派(共産)と世界システム論の労農派(非共産)
- ②明治維新を巡る論争から<1段階革命論/2段階革命論>

### 第4章：「イスラム国」(IS)とコミンテルン(途中まで)

- ①ISとコミンテルンの共通点は、革命の輸出と内ゲバの論理

### ◇イスラム原理主義の哲学(第4章の続きから)

【質問9】本書によれば「イスラム原理主義には〇〇の哲学がなく、△△の哲学しかない」という。〇〇と△△にはどんな言葉が入ると思いますか？ 〇〇：( ) △△：( )  
<予想>〇〇と△△に入る言葉は？

ア. 労働      イ. 分配      ウ. 生産      エ. 搾取

\*

本書によれば、

「イスラム原理主義は、共産主義やファシズムと比べた場合、決定的な違いがあるんですよね。生産の哲学がないんです。＜生産の哲学がなく、分配の哲学しかない＞。しかし、人間は飯を食わないと生きていけない。だから、どこかから取ってくるというように、常に外部を想定していなければならない。

（【質問9】の結果：○○＝ウ（生産），△△＝イ（分配））

#### ◇資本主義の3つの形（①商人，②金貸し，③産業資本）

資本主義を解析すると、資本の動きというのは、最終的に3つの形しかないわけです。

一つは、①「商人資本形式」（買った値段より高くして売る）という形式。次に②「金貸し資本形式」（利子でお金が増える）ということです。しかし、イスラムではこれを禁止しています。近代の資本主義では③「産業資本形式」（労働力と生産手段（機械や原料など）を合わせて、時間をかけて商品をなるべく安く生産し、なるべく高く売る）という形式。

それで、マルクスの『資本論』で重要なのは、＜結局価値を生み出しているのは労働力だけなんだ＞という「労働価値説」です。

#### ◇アラブ世界でテロが続くワケ（収奪者の思想→テロ）

ムハンマドは商人でしたから、アラブ世界においては①の商売の話は出てくるんですが、③のものを作る・生産するというのがほとんどないですね。

それは、実際に生産をしているのは農民なのだけれど、そこから略奪していくという発想で、収奪者の思想です。そうすると、聖戦というものを抜きにした形での社会は成り立たないわけですよ。ですから、あのシステムは自立できないんですよ。自立できないから、常に外部に寄生していくわけで、そうする

とテロがずっと続くわけです。

ムハンマドの時代の戦争は、砂漠のキャラバンを襲撃するものが多いんです。昔のホルムズ海峡あたりの海賊（いまのアラブ首長国連邦のご先祖様）も略奪していたわけだし、馬に乗った山岳チェチェン人も平野のチェチェン人（工場で働く人たち）から略奪していた。

◇マルクス、モーゼス・ヘス、エンゲルスによるマルクス主義

マルクス主義が形成される過程においては、マルクスとエンゲルスと別にもう一人立役者がいた。モーゼス・ヘスという人です。このマルクスとモーゼス・ヘスとエンゲルスの3人によって、マルクス主義はできたわけです。

それで1848年の『共産党宣言』の時点でモーゼス・ヘス（ドイツのユダヤ系社会学者）は同じ陣営にいた。ところが70年代になると、モーゼス・ヘスは別の運動の理論家になっていき、その結果それがあある国の建国につながっていった」という。

【質問10】では、モーゼス・ヘスが建国に深く関わった国とはどの国だと思いますか？

＜予想＞モーゼス・ヘスが建国に深く関わった国とは？

ア.トルコ      イ.イスラエル      ウ.セルビア

\*

◇マルクスからの2つの流れ（思想が社会を動かしている！）

本書によれば、

「アラブ世界において、イギリスをはじめとした西欧の関与や植民地主義の問題はあるにせよ、一応形としては白人が支配している国は、アラビア半島にはありません。となると、植民地支配の残滓ざんしの問題という、イスラエルの生存権の問題になるわけ

それで70年代になると、マルクス陣営にいたモーゼス・ヘス

はユダヤ人の国家をパレスチナに立てようとするシオニズム運動の理論家になって、結局そのヘスの流れからヘルツルが出てきて、イスラエルの建国につながった。

そうすると、マルクスの流れというのは、一つにおいては、マルクス→エンゲルス→レーニン→スターリンという形になって、七十数年間、①<ソビエト体制>を作る源泉となったのですが、もう一つの流れは、マルクス→ヘス→ヘルツルとなって②<イスラエルの建国>につながった。あれだけ小さい国ですが、アメリカに強い影響を与え、いまだに国際秩序の混乱の原因になる国家を作ったというのも、根っこはマルクスたちなんです。結局、いまだに<思想が社会を動かしている>んです。

（【質問10】の結果：イ）

#### ◇「郵便の誤配」（階級と民族＝国民国家）

それで困ったことが持ち上がった。いままで、マルクス主義は、階級という切り口で問題を解決しようとしてきたのですが、階級という切り口に共鳴して熱くなる人の数が限られている。だから、ナショナリズム研究で有名なアーネスト・ゲルナーは「郵便の誤配」を強調する。「目覚めろ、立ち上がれ」という郵便を、神様はちょっと勘違いして、<階級ではなく、民族に届けてしまった>と言ったんです。

間違えて民族に届けてしまったんで、民族が立ち上がる。実際、階級では一部の人しか熱くならないんです。それで、民族は熱くなるんだけど、民族が燃える地域というのはヨーロッパとアジアであって、やはり限定されてしまう。中東地域においてはシリア人を作ることも、イラク人を作ることもできなかった。エジプト人を作ることはなんとかできたかと思っただけで、結局は失敗したのかもしれない。つまり、民族（＝国民国家と言ってもいい？：増田補）ができませんよ。ナイジェリアだってそうです。ナイジェリア人という国民ができていれ

ば、イスラム武装勢力「ボコ・ハラム」による拉致・虐殺事件なども起きないわけです（高橋和夫によれば、＜中東ではイラン、トルコ、エジプト以外は全て国モドキだ＞と：増田補）。

#### ◇大量殺人と「人類救済計画」

19世紀の終わりの労働組合は「組合のために命を捧げます。もし組合の秘密を漏らしたら、殺されても文句を言いません」といった形の、いわゆる秘密結社だった。

そうすると、労働者のために、あるいは自分の宗教のために命を捧げるといふ決意をして、そのために本当に死んでもいいと思うようになると、人の命を奪うことに対するハードルがものすごく低くなるわけです。

だから、大量の殺人というものは、だいたい「人類救済計画」が立っていないとできないという。

【質問11】本書によれば、＜「人類救済計画」と結びついた大量殺人＞にはどんな例があると思いますか（選択肢なし）。

\*

本書によれば、

「オウム真理教だって、恨み辛みではあんなに人を殺せない。松本智津夫の「ポア」の理屈がそうです。輪廻転生の中で、彼らをこのまま生かしておくのと汚れていくから、次に生まれ変わるときに人間に生まれ変わってこない。汚れていないままのうちにポアしてあげた方が、彼らのためになるという論理。そもそも「ポア」とは「高いステージに上げる」という意味ですが、それを殺害する、という意味で使っていた。

マルチン・ルターが、ドイツ農民戦争の時に「農民をできるだけ早く殺せ」と言うんです。なぜならば、権力に反抗することは悪であり、罪を犯すことなので、そうすると魂が汚れてしまう。こういうことを農民たちが続けていると、死んだ後、復

活ができなくなる。今殺せば、魂はそれほど汚れていないから、終末の時に助けるチャンスがあるから、だからできるだけ早く殺せ、というんですね。これが愛の実践だと言って、アジったわけです。

それは、原爆投下の論理にも通じます。日本は異常なイデオロギーにとりつかれていて、戦争を継続していこう。だから、ここで原子爆弾を使えば、本土決戦によって失われるアメリカ兵の命だけではなく、日本人の命も救われる。ゆえに、原爆投下は人道的なんだと。こうした考え方は、日本人からすると受け入れがたいし、生理的な嫌悪をもよおすけれども、アメリカ人の中ではいまでも通用しています。

そういう大量殺人の思想というのは、憎いから人を殺してやれということではなく、まず大義なり理念に自分が命を捧げる。それでそのあと、人類の大救済計画や被害者のミニマム文化といった理論になる。そうすると、それと同じ発想で作られたのが、無人暗殺機のドローンです。無人暗殺機のドローンが人を殺す、こういう兵器を作り出す思想が重要で、テロリストたちはそのドローンに殺されるのはかまわないと考える。

でもそれらの根っこにあるのは、<自分たちはみんなそれなりに、人道的に正しいことをしている>という意識なんです。（【質問11】の結果：オウム真理教のポア、ドイツ農民戦争でのマルチン・ルター、原爆投下の論理など）

◇革命のために人を殺してもいいのか、正しい戦争はあるのか

昔よく議論になったのは、<目的は手段を正当化するのか>、<革命のために人を殺してもいいのかどうか>ということなんです。あれはある種の永遠の課題なんです。ISはこれをよしとする論理なんですね。神の意思を現代に再現するためには敵を殺すのは当然である。あるいは敵と対峙したときに、たまたま女性や子どもが間にいて、彼らを殺さないと敵を殺せないのも

あれば、女性や子どもを殺してもいい。＜目的のためには、自爆テロをして付随的に無関係な人が死んでもそれは仕方のないことである＞、こういう理論につながっていく。それは、＜正しい戦争はある＞という論理につながっていくわけです。あるいは、＜戦争を終わらせるための最後の戦争＞とかですね」という（＜ロシアによるウクライナ侵攻も正しい戦争だ＞とプーチンさんは考えているのでしょうか：増田）。

## 第5章：女性が資本主義を支える？

### ◇『資本論』と女性労働者

本書によれば、

「かつて男女はほぼ一緒に労働をしていた時代があります。『資本論』には、児童労働調査委員会の報告書の引用としてこのように書かれています。「スタッフフォードシアでもサウス・ウェールズでも、少女と婦人とが、炭坑やコークス置き場で、昼間のみでなく夜間も使用されている。この慣習は、周知の大きな弊害をともなうものとして、議会に提出された報告書でしばしば論及された。男性と一緒に働かされ、衣服によってはほとんど男性と見分けられず、埃と煙とで汚れているこれらの女性は、彼女らの非女性的な仕事にはたいてい避けられない結果である自尊心の喪失から、性格の墮落に曝されている」と。

つまり、こうした女性たちは仕事が終わったらジンをあおりに行っていた。家族なんてそんなもの、なんで持たないといけないんだと考えるようになるということです」という。

【質問12】本書によれば、このように記述されたイギリスの当時の女性労働者の平均寿命はどれくらいだったと思いますか（児童労働調査委員会の報告書は1862年のものか：増田補）。

＜予想＞    ア. 20歳くらい                      イ. 35歳くらい  
              ウ. 50歳くらい                      エ. 65歳くらい

\*

### ◇「仕事か、家庭か」は根源的問題

本書によれば、

「あの頃の女性労働者の平均寿命は20歳くらいです。こういう状態になって困ってしまったんです。女性が、次代の労働者になる子どもを産んでくれないと、資本主義が再生産できないですから。（【質問12】の結果：ア）

そうすると、今度は女性を家庭に利用する。その＜仕事か家庭か＞というバランスは、資本システムの再生産と、いまの景気状況の中で＜どれだけ女性の労働力を活用して、労働力の値段を下げていくか＞という個別の資本の問題の中で繰り返し起きてくる、と『資本論』にも書かれています。

その結果振り子が振れる。あるとき男女完全にまったく同じ条件で、同一労働同一賃金みたいな形になると、極端な低賃金の理由になる場合もある。逆に母性の保護のような概念を持ってくると、それを理由に機会の均等が与えられなくなる」という。

### ◇安倍政権の女性「活躍」社会？

【質問13】本書によれば、＜安倍政権が狙っているのは女性「活躍」社会ではなく、女性「〇〇」社会である＞という。〇〇にはどんな言葉が入ると思いますか（選択肢なし）。

\*

本書によれば、

「いずれにしても、安倍政権が狙っているのは何かというと、『資本論』に書かれてある通りのもので、＜システムを維持するために、女性をどう使えるか＞ということなんですよね。

安倍政権が「女性の活躍」ということを言っていますが、最初は女性「活用」と言っていたのです。そのうち「活用」というのはいかななものかとさすがに誰かが指摘したらしく、「活躍」とい

う言い方に変えました。

しかし女性を「活用」という、女性を客体にする論理で組み立てられていたものを、突然女性が「活躍」できる輝ける社会にと、そこだけ主語にして、主体にしても、なかなかうまくいかないですね」という。（【質問13】の結果：活用）

#### ◇労働力の再生産の費用を引き下げようとする資本の運動

本書によれば、

「マルクスの『資本論』においては、＜労働者の賃金は労働力の再生産の費用になる＞んですね。それから、マルクスも書いていますが、＜労働力の再生産の費用をどんどん引き下げよう＞といういまの資本の運動があって、そもそも＜社会的な再生産費自体を下げる働き＞がある」という。

【質問14】では具体的に、＜社会的な再生産費自体を下げる働き＞にはどんな例があると思いますか（選択肢なし）。

\*

本書によれば、

「それこそ吉野家の牛丼で。百円ショップで。あるいは日高屋のラーメンとか、服はユニクロでと。とりあえず、ものを着たり食べたりすることによって、相当安く生活できるようになりました。くだからその分、企業は賃金を上げなくてもいいんだよ」ということになる。正規労働者に比べてはるかに給与水準が低い非正規労働者でも、ギリギリ生活できる程度までに、社会的な生活費がこのところずっと引き下げられてきたんだらうと思います。これはマルクスが指摘したとおりのことが起きていると思うんですよ」という。

（【質問14】の結果：吉野家の牛丼，百円ショップ，日高屋のラーメン，ユニクロなど）

## ◇ヒューマニズムの復権を

本書によれば、

「ISは、人質を生かしておいた方が自分たちの目的（イスラム世界革命＝カリフ帝国の建設）にとって得か、それとも殺してしまってインパクトを与えた方がいいかという、非常に冷徹な計算によって、人間を物として見ているわけですよ。

これはブラック企業もそうなんですよ。<人間を物として見る>ということが現在の主流派経済学にも、テロリズムの哲学にもある。それに対してヒューマニズムの回復を強く唱えたのが、ピケティ氏です。人間は物ではない。人間は人間なんだと。

そうすると、ピケティ氏もそうですが、池上さんも私も大きなところで言うと、ヒューマニズムの回復という作業をしているのではないかと思うんです」という（ヒューマニズムの回復については板倉聖宣さんの考えも同じですね：増田）。

## 第6章：わたしと『資本論』

### ◇池上彰と『資本論』

本書によれば、

「私（池上彰）は高校の政治経済の授業で、経済の仕組みというのは面白いと思ったのが『資本論』に興味を持つようになった原点です。同時に、経済学は金儲けのためのものではなくて、貧富の差があるという世の中にこんな問題があるんだろうというのを解明する学問なんだというのがわかった。数学が苦手だったので、数式が出てくる近代経済学よりマルクス経済学がいいと思いました。

高内俊一という人の『現代日本資本主義論争』という、労農派と講座派のそれぞれの理論をわかりやすくまとめた本があります。これがかなり客観的、いわゆる党派性なく、講座派と労農派の理論を整理しているのですが、高校生の時にこの本を読んで、マルクス経済学を勉強する時に、労農派と講座派のどち

らが日本経済を分析するのに優れているか、適っているのか、高校生なりに悩んだんですよ。

大して知識もない中で、なんとなく労農派のほうが正しいような気がして、大学では労農派の先生がいるところで勉強しようと思ったのです。しかし、労農派の先生がいる大学の入学試験が中止になってしまって、しょうがないやと。では労農派でなくても、マルクス経済学をちゃんとやっている大学の経済学部はどこかと思って調べたら、意外や意外、慶應義塾大学であるということがわかって受験しました。新講座派の先生たちが多かったのですが。

講座派はまさに、共産党系の学者たちなのですが、新講座派になると講座派の理論を引き継ぎつつ、共産党とは政治的に一線を画したり、共産党のやり方を批判したり、そういう学者たちが出てくるんですけど、まさにそちらの系統の先生方でした。

#### ◇佐藤優と『資本論』

私（佐藤優）が『資本論』と出会ったのは、浦和高校時代。それこそ労農派だが講座派だが、全然わからなかった頃ですが、叔父が社会党の左派に属していた兵庫県議会議員で大変な共産党嫌いだったから、共産党というオプションは最初からあまりなかった。

私が高校生になったのが1975年で、私ぐらいの世代だと共産党系に行くのでなければ**新左翼**に行くわけです。革マル派とか中核派とか第4インターとかブント（共産主義者同盟：初代書記長は島成郎）とか。現に高校でもそういうシンパもいたんですけど、私はどういうわけか社会党左派に流れた。

社会党左派には、社青同（日本社会主義青年同盟）という組織があった。ところがこれもまた複雑で、いくつかの分派がありました。大体私たちぐらいの頃の学生運動で社青同というと、

いまの革労協といって、内ゲバをしょっちゅうやっていたグループになるんですが、私が属したのはそれではなく、社会主義協会派というグループ。高校生の同盟員は日本中で3人くらいしかいなかったと思います（笑）。

そこはものすごく勉強させるんです。とにかく本を、それもマルクス主義の古典的なものを読ませる。そうしたらそこにいるときに、埼玉大学の鎌倉孝夫さんという、岩波文庫版『資本論』の翻訳も一部担当された先生と出会いまして、その先生のもとで、1年ちょっとくらい『資本論』の最初の読み解きを教  
えてもらいました。

さらに『資本論』が身近になったのは、ソ連の崩壊を見た時です。殺し合いをしながらの国有財産のぶんどり、資本の原始的蓄積（封建社会が解体し、資本制社会が成立する過程における生産様式の変化。市場経済の形成過程において封建的土地所有と農奴制が解体され、同時に土地を剥奪された農民や小生産者は賃労働者へ転化するが、このように生産手段を所有する資本家と無所有の労働者が創出される課程のこと：以上は本書の解説より）という『資本論』に書いてあることがそのまま起こったのを目の当たりにして、資本主義は恐ろしいものだ  
ということが皮膚感覚でわかりました。

『資本論』を読んで、どういう意味があるかと言うと、やはりこの社会の構造の限界がわかる。それと同時に、＜お金や出世だけにとらわれた人生ではダメだ＞ということも見えてきます。逆に、＜ある程度働かないと生きていけない＞ということがはっきりわかるから、世の中をひねくれた形で見ると人間にもならない。

そういう意味で『資本論』の論理をきちんとおさえていると、私は非常に役に立つと思う。世の中にいくつか役に立つ思想はありますが、『資本論』はそのうちのひとつだと思います」という。

## ◇革マル派と中核派の内ゲバ

本書によれば、

「たとえば革マル派であるとか、中核派、あるいは革労協、社青同解放派であるとか、こういう新左翼（1950年代から1960年代にかけて現れた、共産主義運動とも社会民主主義系の左派とも異なる新たな左翼思想、運動の総称。日本では、第4インターナショナル系の日本トロツキスト連盟が57年に結成され、日本革命的共産主義者同盟（革共同＝中核派、革マル派などの源流）の源流となった。60年安保闘争後、激しい分裂を繰り返しながらさまざまな運動や政治の流れを作った：本書解説より）の運動は、ある時期若い人たちを非常に惹きつけたわけで、おそらくそれらのシンパや同盟員にならないまでも、その経路の全学連を経た人だったら、数十万、百万人を超えるオーダーでいると思うんですよ。今はみんな黙っているだけで。

ですから、その思想はもう一度整理しなければいけないと思います。＜通常の運動論＞は、①理論的に自分たちが正しいと謳い、②それを学生運動なり労働運動のマーケットに持っていき、そのマーケットで競争して、運動的に乗り越えようというんですね。それにより③最終的に組織として強化されていくと言うのです。ところが革マル派の運動論（乗り越えの論理）は通常の運動論とは異なる」という。

## ◇革マル派の「乗り越えの論理」

【質問15】では、革マル派の運動論（乗り越えの論理）は通常の運動論とはどのように違うのでしょうか。本書（佐藤優）によれば、通常の運動論①、②、③とは順番を変えているのですが、どのように順番を変えているのだと思いますか。

＜予想＞革マル派の運動論は、通常の運動論とは

ア. ①と②が逆      イ. ②と③が逆      ウ. ①と③が逆

\*

## ◇順番が逆になると内ゲバの論理になる

本書によれば、

「<革マル派の思想>の一つに「乗り越えの論理」というものがあります。①まず理論的に自分たちのほうが優れているとして、相手を理論的に乗り越える。その次は、②組織的に乗り越える。つまり、相手の組織にテロをかけて解体する。それで③最終的には運動的に乗り越える。政治的に自分たちは勝利すると。つまり、<通常の運動論>の②運動と③組織を逆にするわけです。そうすると内ゲバの論理になるわけです」という。

（【質問15】の結果：イ）

## ◇新左翼と「人を殺す思想」（正しい暴力はあるか）

本書によれば、

「浦和高校の応援団の先輩で、中学校も私と同じだった人が東京教育大学へ行って革マル派に入り、中核派に捕まって殺されてしまったときに、革マル派の『革命的暴力とは何か？』という本が出た。<中核派の暴力は「無原則な政治屋どもの殺し」で、革命性がない。しかしわれわれ（革マル派）が革命的に行使する暴力は正しい>という本なんです。自分たちの暴力は正しくて、相手の暴力は間違えていると。

それから遅れて、今度は革マル派が早稲田大学の中核派の人を殺しちゃったんですよ。その時は、今度は中核派のほうが『内乱期の反革命』という本を出して、それは<革マル派を徹底的に解体すれば世の中は良くなる>といった論理を立てて、両方が殺し合いの世界に入っていくんですよ。そうすると、中核派も革マル派も、日本革命的共産主義者同盟という同じ母体から生まれているのに、途中から互いに殺し合うようになってくるんです（そういえば、ISもアルカイダから生まれたのに、途中から互いに殺し合うようになった：増田）。

ISがあのような行為をするのには、それなりの理由があるん

です。だから、日本の左翼とか新左翼、オウム真理教も含めて、人を殺す思想がどうして生まれてきて、なぜそれが問題になるのかをもっと掘り下げるべきです。なぜあれだけ頭が良くて意欲のある人たちが、暴力の淵に沈んでいってしまったのか。これは非常に重要なテーマだと思うんです」という。

## 第7章：知性という最大の武器

### ◇山口真由さんの東大首席卒業とエリートの思考の構造

本書によれば、

「山口真由さんの『東大首席弁護士が教える超速「7回読み」勉強法』を読んでみた。あの本は、＜東大首席卒業の彼女がどのようにして東大の首席になったか＞について書かれていますが、あの本はある意味でいまの東京大学（エリートの思考の構造）を象徴している」という。

【質問16】では、山口真由さんはどのようにして東大首席卒業の座を勝ち取ったのだと思いますか。

＜予想＞山口さんが東大首席卒業の座を勝ち取った戦略とは

- ア.好きな科目を楽しんで学び、他の科目はそこそこにやる
- イ.嫌いな科目も含め、すべて必死に取り組む
- ウ.最低限の単位しか取らない
- エ.最低限より少し多めに単位数を取る

\*

本書によれば、

「東大はある時期から天才ではなくても全優がとれるようになった。それは東大が国際基準で相対評価になって、3分の1は優をつけなければいけない制度になったからです。

そうすると、トップにならなくても、全科目で3分の1に入ればいい。それを狙っている人は山ほどいる。だから自分は考えた。そういう人たちは単位を落とすことがないので、全員最

低限の単位しか取らない。それで自分は2単位多く取ったと。  
162単位。そうすると、全優はたくさんいるけれども、首席になるのにその次の基準は単位数になる。私はそれに気づいた、  
というわけです。(【質問16】の結果：エ)

だから、いまのエリートの思考の構造が端的に分かる。＜資本の論理が金儲けの方向じゃなくて、成績や出世という方向に行ったらこういう形になる＞ということです。

#### ◇反知性主義に対抗するには

反知性主義に対抗するのは、そう簡単にはいきません。だから若い人たちに、数字というのは大切なんだよ、と伝えたい。数を真面目に定量化していくということが、日常生活でどれくらい大切かと、アナロジーを駆使して教えていかなければいけない。

たとえばトイチ（10日で1割の複利）でお金を借りるとどうなるか、という問題を考えてみます」という。

#### ◇1円をトイチで10年借りると？

【質問17】では、実際に1円をトイチで10年借りると、どれくらいになると思いますか。

＜予想＞ ア.1億円 イ.100億円 ウ.10兆円 エ.1000兆円

\*

本書によれば、

「これは数学者の芳沢光雄さんなどが対数の重要性のところでやっています。

(以下は増田の電卓を使った計算＝入力ミスがあるかも?)

1日目・・・1円　10日後・・・1.1円　20日後・・・ $1.1^2 = 1.21$ 円

30日(1ヶ月)後・・・ $1.1^3 = 1.33$ 円　1年後・・・ $1.1^{36.5} = 34$ 円

2年後・・・ $1.1^{73} = 1051$ 円　3年後・・・ $1.1^{109.5} = 3.25$ 万円

4年後・・・ $1.1^{146} = 121.5$ 万円　5年後・・・ $1.1^{182.5} = 3415.6$ 万円

6年後・・・ $1.1^{219} = 11.6$ 億円      7年後・・・ $1.1^{255.5} = 358.6$ 億円  
8年後・・・ $1.1^{292} = 1.1$ 兆円      9年後・・・ $1.1^{328.5} = 37.7$ 兆億円  
10年後・・・ $1.1^{365} = 1165$ 兆円      (以上、増田によるアツシ計算)

1円をトイチで借りると、10年で日本の国家予算の10倍以上の1000兆円を超えてしまう」という。(【質問17】の結果：エ)

#### ◇非正規雇用が増えると資本主義経済がダメになるワケ

本書によれば、「資本が自己増殖をすることによって、労働者の賃金をなるべく低く抑えようとすると、さまざまな問題点が出てくるということ、自覚的にとらえるかとらえないかで、ずいぶん違うと思うんです。たとえば、非正規雇用が増えると、資本主義経済の中のどこかでダメになる」という。

【質問18】では、非正規雇用が増えると資本主義経済がどこかでダメになるのはなぜだと思いますか（選択肢なし）。

\*

本書によれば、

「非正規雇用が増えると、資本主義経済の中で短期的にはものすごく利益が上がったりするけれども、不安定な状態になった人たちが結婚しなかったり、子どもを産まなかったりすることで、少子化が一段と進む。これではどこかで必ずダメになるという、先を含めて見通すことができる視点が必要だと私（池上）は思うんです。(【質問18】の結果：少子化が進むから)

#### ◇敵の内在的論理を学べ

IS対策をしようと思うなら、ISの内在的な論理を私たちは把握しなければいけない。つまり、敵の内在的論理を学ぶということです。ISの論理を知って初めてIS対策がとれるわけで、同じように『資本論』が役に立つのではないかと思います。<資本主義はどうしてこんなにいろいろな問題が起きるのか>という内在的な論理、まさにそれを研究分析したのが『資本論』な

んです。いまなぜ生きにくいんだらうとか、格差の問題とか、そういうことをもたらしている敵の正体を知るために『資本論』を学ぶことが大事なのではないでしょうか。

あるいは、資本の循環みたいなことを知っていると、定期的にバブルが起きることがわかるという。

◇定期的にバブルが起きている？

【質問19】では、（池上彰によれば）バブルはだいたい何十年ごとに起きるのだと思いますか。

<予想> ア. 10年ごと            イ. 20年ごと            ウ. 30年ごと  
          エ. 40年ごと            オ. 50年ごと

\*

本書によれば「大きなものも小さいものもありますけれども、だいたい30年ごとにバブルが起きる（日本の直近のバブルは1986～1990年だからもうバブル期に入ってる？ ファンドの澤上さんはくバブルに備えて現金化を進めている>と言っている。中国ではついに土地バブルがはじけた？：増田）。人間は自分の経験から学ぶことはできるけれども、歴史から学ぶことができない。バブルが始まってしまうと、みんな空前の好景気と思って、バブルがはじけて初めてあれはバブルだったと思うわけね。人間というのはそういう愚かなものなのですが、『資本論』を学んでいると、いつまでもそんな状態が続くわけではないということが分かるはずなんです」という。（【質問19】の結果：ウ）

◇資本の論理に巻き込まれないために

【質問20】本書によればく資本の論理に巻き込まれないために、するとよいことがある>という。どんなことだと思いますか。

<予想> ア. 子供の学校の成績がアップしたら小遣いもアップ  
          イ. 子供がお手伝いをしてくれたら五百円あげる  
          ウ. 家族旅行をする            エ. その他

\*

本書によれば、「『資本論』を読むと、資本の論理に巻き込まれないためには直接的な人間関係が重要だということがわかるんです。資本の論理が分かると、お手伝いをしたら子どもに今日は五百円あげるとか、そういうことをしなくなる。＜家族の中で金を介在させたらいけないんだ＞ということが、理屈の上でよく理解できるわけですよ。そうすると、直接的な人間関係が大切になってくる。合理性とは違うこと、＜お金には換算できないものがあるんだ＞と言って、たとえば親が家族旅行の重要性を認識できる。つまり、私たちが人間性を失わないようにするには、そのすべてをお金に換算する論理から抜け出る力が必要なんだということなんですね。（【質問20】の結果：ウ）

**終わりに：資本主義社会において搾取は不正ではない（佐藤）**

本文でも詳しく論じましたが、労働力が商品化されることによって、資本主義はあたかも永続するようなシステムとして発展します。賃金は、労働ではなく、労働力商品の対価です。労働者は労働力商品の対価である賃金よりも多くの価値を生産することができるのです。そして、賃金を超える価値は、資本家の利潤になります。資本家の利潤は労働者を搾取することによって得られたものです。**資本主義社会において、搾取は不正ではありません**。なぜなら、労働者は資本家と自由な合意によって賃金を決定するからです。

**文庫版あとがき：資本主義に対する異議申し立てを！（佐藤）**

私たちはソ連崩壊後の時代に生きている。ユーラシアと中央ヨーロッパに存在した社会主義が、＜人間を疎外し、環境を破壊し、機会をうかがっては他国の内政に干渉し、政権転覆を図る＞ような官僚主義的な全体主義体制であったことをよく知っている（今のロシアも?：増田）。また新左翼の人々も、内ゲバ

にエネルギーを注いだ。その結果、新旧両左翼は、圧倒的大多数の日本人にとって魅力のないものになってしまった。

資本主義に対する異議申し立てを、私たちは行わなくてはならない。その動因は、ヒューマニズムでも正義論でも構わない。しかし、資本主義に対抗する運動が、スターリン主義や、反スターリン主義を掲げた非寛容な性格を帯びたものになってはならない。人間を疎外から解放する新しい運動を作り出さなくてはならない。そのためにはまず、資本主義の内在的論理を知らなくてはならない。資本主義社会のシステムの中で圧倒的大多数の人々は、労働力を商品として売る以外に生活の術がない。このく労働力商品が、資本家の報酬や企業の内部留保を含む価値を生み出す唯一の源泉<sup>くびき</sup>なのである。この事実さえつかんでおけば、われわれはカネの軛から自由になることができる。

池上・佐藤『希望の資本論』(その2)の要約の要約

第4章：「イスラム国」(IS)とコミンテルン(途中から)

②イスラム原理主義には生産の哲学がなく分配の哲学しかない

③大量殺人思想は人類救済計画と結びつく(オウム, 原爆, …)

第5章：女性が資本主義を支える？

①安倍政権が狙っていたのは女性「活用」社会である

②労働力の再生産費を下げようとする資本の運動(吉野屋…)

第6章：わたしと『資本論』

①順番が逆になると内ゲバの論理になる(革マル派と中核派)

②新左翼やオウムから人を殺す思想がなぜ生まれたかが重要

第7章：知性という最大の武器

①敵(ISや資本主義経済)の内在的な論理を学べば対策できる

\*

本書の内容をひとこと言えば「資本主義社会では搾取が不正でない以上、私たちは資本主義に対する異議申し立てを行わなければならない。そのためには敵の内在的な論理を学べ！」